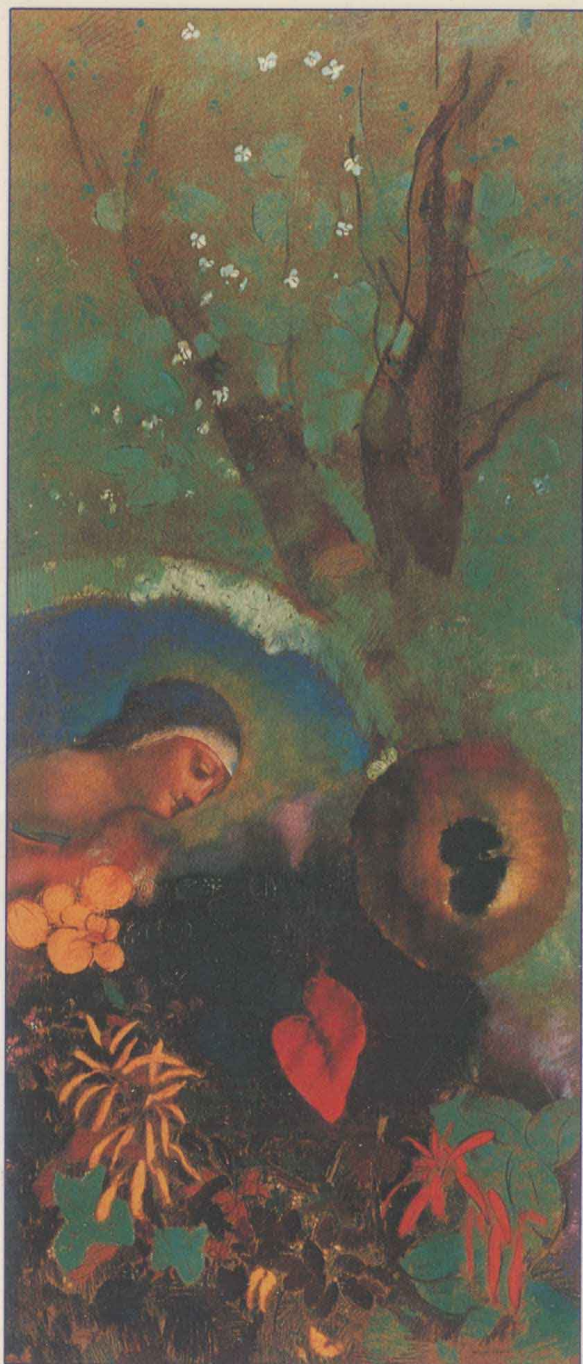


聖姫が笑った



ガンに克つた母と娘の記録

崔雲姫

ガンに克つた母と娘の記録

聖姫^{むすめ}が笑つた

崔雲姫

著者紹介

崔雲姫

一九二八年 韓国大邱市生まれ。慶北高

等女学校卒

一九五三年 結婚、夫君炳圭氏とともに

福祉法人の孤児院を開設。

朝鮮動乱後の孤児福祉に力

を尽くす。

一九七七年 同院閉鎖

聖姫が笑った

ガンに克った母と娘の記録

一九七九年七月二十五日 第一刷

著者 崔雲姫

発行者 江口克彦

発行所 P H P 研究所

京都市南区西九条北ノ内町11
番〇七五―六八一―四四三二

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©Unih che, 1979 Printed in Japan
0095-34400-7159

聖姫が笑った／目次

第一章

発病

9

第二章

手術

39

第三章

住居移転

65

第四章

招請状

101

第五章

渡航

137

第六章

闘病

167

第七章

治癒

197

あとがき

213

聖^{むすめ}姫^がが笑^つつた

―ガ^ンに克^つつた母と娘の記^録

中山さん御夫妻に捧ぐ

第一章 発 病

家族団樂のなかで起こったハプニング

聖姫が初めてもどしたのは、一九七七年一月の初旬だった。

大邱市の大学でピアノを専攻していた彼女が、冬季休暇に入って帰省し、夕食後の一家団樂で寛いでいた時である。

その頃、私と夫の炳圭は、私たちの仕事である福祉事業（孤児院）が、経済的な問題でだんだん先細りに苦しくなっており、その打開策として、新しいテープ工場の事業を起こすことに夢中になっていた。そのため、京城市に何日も泊まりがけで出かけたりしていたので、施設のあるこの家に家族五人がそろうのは、数カ月ぶりのことであつた。

一月のそんなある日の夕食後、次女の恵淑が、長女の聖姫にピアノの伴奏をねだって歌をうたい始めたのだった。

恵淑もその末妹の信英も、歌が上手だった。夫の炳圭もまた、私からみても、職業をまちがえて選んだというほど声がよかった。

こうして家族みんなで合唱できるなどということは、経済的な苦しみも辛さもすべて忘れさせて、なにものにもかえがたいものに思われたし、新しい事業にとりかかる私たちの門出にもふさわしかった。

みんなであれやこれやと合唱し、夫が得意の「ダニー・ボーイ」を独唱している最中に、伴奏していた聖姫が「ごめんなさい」と言う、すっと立ち上がって部屋を飛び出した。

びっくりしてついて行くと、洗面所で夕食に食べたものを全部吐いていた。

「大丈夫？」

「ええ、もういいわ。少しむかついただけなの。最後までがまんするつもりだったけれど、こらえられなくなつて……。でも、もうなんともないからもどきましょう」

口元をタオルでぬぐうと、何事もなかったようにケロッとした表情で、みんなのいる応接間にもどつた。

「いったいどうしたんだい？」

「ちよつともどしたんですけど、もういいって言ってます」

「やさんだらうかな」

「いいえ、お父さん歌っていただきたいの。はい、どうぞ」

ちよつとおどけたポーズをとると、聖姫は再びピアノの前に坐り伴奏を始めた。

「じゃ、続けようかな」

夫の歌声が部屋いっぱいに広がった、そして、それに和するうちに、いつの間にか家族も一緒に歌い出していた。「夕ご飯があつたのかな」と軽く思いながら、私も娘達の若さにとけこんで、時間のたつのも忘れて楽しい一時を過ごした。私達一家が、こんなに明るく、楽しく歌える

のも、これが最後になるかもしれないとは、この時いったい誰が想像したのだろうか。

四、五日たつて聖姫^{スンヒ}はまた吐いた。おなかは痛くないのかとたずねたが、なんともないと言う。事実、何事もなさそうに熱心にピアノを弾いていた。四月に大邱市^{テグ}のオーケストラと競演することになっていたので、練習に夢中になっていたのだ。『少し変だな』とは思ったが、吐いただけで体調には何の変わりも見られなかったので、それ以上詮索することはしなかった。

それからさらに四、五日たつて、また吐いた。聖姫^{スンヒ}自身は吐きながらも、

「おなかの調子は何ともないのよ。どうしてもどしてしまふのかしら」

と、自分自身でも合点のいかないふうだった。そして、いつものようにピアノの練習に余念がなかった。

しかし、あまりたびたびなので私も心配になり、近所の病院に行かせた。ただ、大きくなった娘が、一度や二度吐いたことぐらいで、母親まで大仰^{おおぎよう}に騒ぎたてると医者に思われなくなかったので、私の替わりに恵淑^{ヘソク}と一緒に行かせた。

小一時間して娘たちは明るい表情でもどつてきた。

「たいしたことないって言ったわ。五日ばかり薬飲むようになって……」

「そう、よかったわ」

その言葉に安心して、その後、私も仕事に追われる日々がつづいた。

主人と私が、再び京城市^{ソウル}に行つて工場（といっても、テープをつくる町工場くらいのちっぴけなも

の)のためにかけまわってもどつて来たのは、一月の下旬であつた。久しぶりに顔を合わせた聖姫からは、何の報告もなかったが、妹の恵淑は心配げに言つた。

「お母さん。留守の間にね、お姉さんが何度もどしたのよ」

私は不吉な予感がして、聖姫を問いつめた。

「どうしたのかしらね。おなかは痛くないの?」

「痛くないわ」

「麥ねえ、ご飯の味はあるの?」

「ええ、おいしいわ。よく食べてるのよ。少し食欲が減つてくれるといいんだけど」

「何を言つてるのよ、この子は」

聖姫は体重が五十四キロもあつた。身長百五十六センチ。ちよつぱり太り気味で健康そのものようにピチピチしているのを、夫と私は喜んでいたが、本人はそうでなかつた。

「みんなが健康過ぎるって言っているのよ。やせたいわ、せめて恵淑くらいにね」

兄の誠一がよくからかつて言つたものだ。

「もういい加減にしろよ。君の脚は佛国寺の柱みたいじゃないか。その調子じゃお嫁に行けなくなるぞ」

「いやよ、兄さん!」

聖姫がむきになればなるほど、誠一はおもしろがつた。

「いくら地球が広いからって、横にばかり大きくならなかったいいじゃないか。天も高いんだから、少しばかり背丈も伸ばしたら？」

「まあ失礼ね。天までとどこまでスマートになりたいわ。でも、いくらやせたかったってやせないもの」

それほど聖姫^{スンヒ}は病気に縁のない元気な娘だった。しかし、すでにこのとき健康そのものにみえる体を、ガンがむしばんでいようとは……。

胃潰瘍と総合病院で診断されたが……

二、三日たって、聖姫^{スンヒ}はまた吐いた。半分くらい消化されてどろどろした状態の液状のものだった。不思議なことに、吐けばむかつきもなくなるようだった。

「大邱^{テグ}には今度いつ行くの？」

冬休みであっても、ピアノのレッスンのために、十日に一回は大邱^{テグ}市に通っていた。

「二十九日よ」

「じゃあね、その時に総合病院に寄ってみてね」

「痛くもないのに行くの？」

「だって薬飲んでも効かないんでしょ。痛くなくってもそんなにもどすのは、何か異常がある証拠よ」

「そうかしら」

「そうよ。いつそのこと私も一緒に行こうかしら」

「まあ、お母さん。私、もう子供じゃないわ。一人でちゃんと行けます」

「その方がありがたいわね」

大邱市^{テグ}から帰った日、聖姫^{スンヒ}はすごく上機嫌だった。

「かるい胃潰瘍だって。先生は心配する必要ないっておっしゃったわ」

「そう、すぐよくなるっておっしゃった？」

「田舎から出て来ましたと言ったら、十日分の薬をくれたの。飲んでみて、また来なさいって……」

診察してくれた先生は名のある内科医だったので、その先生の診断だったら間違いないだろうと安心していた。

しかし、その後も聖姫^{スンヒ}は三日に一回くらい吐いたが、本人は別に心配もせず薬を飲んでいった。聖姫^{スンヒ}は長女らしく、ピアノの練習のじゃまをしたがる妹たちと、合い間をみては雪合戦をしたり、トランプに興じて相手になっていた。

二月上旬のある日、工場建設の相談をするために、大邱市^{テグ}の友達、英仙女史^{ヨンジ}の所へ出かけた。彼女は一緒に工場を経営する人を紹介してくれた上、資金の大部分を融通してくれることになった。英仙女史^{ヨンジ}の夫の金氏は、産婦人科の医者だが、隣近所のどんな患者さんでも快く診てくれて